

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23593202

研究課題名(和文) 基礎看護技術教育モデルの開発と検証 - 他大学との連携と協働 -

研究課題名(英文) Validation an educational model for learning basic nursing skills to improve practical nursing competency

研究代表者

前川 幸子 (MAEKAWA, YUKIKO)

甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・教授

研究者番号：30325724

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：看護学生の看護実践力を培うために、「基礎看護技術学習の道しるべモデル」を構築した。その特徴は「生活者としての対象者の理解」「安全、安楽、自立・自律、その人らしさをふまえた看護援助」を基軸に据え、技術学習の道筋が可視化できることにある。本モデルの効果と汎用性を検討するために、独自に作成した質問紙による自記式調査を行った。データ収集は本モデルで学習した学生で、分析方法は統計的手法と質的帰納的分析で行った。その結果、学習の道筋が可視化されていることが学生の学習意欲を高め、確かな看護技術の習得に繋がっていた。また本モデルを用いて他大学と連携、協働しながら実践した結果その汎用可能性も明らかになった。

研究成果の概要(英文)：We developed an educational model "The Michishirube-Model for the Study of Fundamental Nursing Art" for improve practical nursing competency of nursing students. The key aspects of the model are "understanding about patients as a living" and "understanding the core fundamental nursing art: safety, comfort, independence (autonomy) and individuality". And, it enables the way to basic nursing skill acquisition to be visualized.

In this study, to evaluate the effect and the generality of this model, we conducted an original self-administered questionnaire survey. The data was collected from students who had undergone learning based on this model, and statistical analysis and qualitative inductive analysis was used. The results were as follows: The visualization of the way to learning improves student's motivation for learning. And it led to the acquisition of a certain nursing skills. Moreover, it was clarified that the model had a possibility of generality.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護教育の方法 基礎看護技術 教授-学習過程

1. 研究開始当初の背景

高度複雑化する医療、患者の高齢化・重症化など医療を取り巻く環境は大きく変化し、看護は高度な看護実践力が求められるようになった。それに伴い基礎看護技術教育(以下、技術教育と略)で取り扱うべき授業内容は、増加・多様化の途を辿っている。しかし、学生の生活体験・主体的学習の乏しさから、教育現場では、対象者への配慮ある看護実践よりも看護手順や手技の習得で精一杯となる傾向¹にある。これらの課題を踏まえ、平成21年、保健師助産師看護師学校養成所指定規則等の一部改定が行われた。基礎看護学領域は、教育内容の充実、看護技術の確実な習得、

臨床実習の充実を目指し『専門分野』と位置づけられた。これは基礎看護学の段階を明確に区分し、看護師等に求められる基本技術の確実な習得を促すものと捉えることができる。本改定に基づき、看護系大学では『専門分野』における技術教育で教授する項目を精選し、到達度を明確化し、高い看護実践力を有する看護師等を育成するための効果的な教授方法を再構築することが求められていることになる。

これまでの看護基礎教育に関する提言では、文部科学省から提示された「大学教育において習得が期待される看護基本技術」(2002)や、厚生労働省から提示された「臨床実習において看護学生が行う基本的な看護技術の考え方」(2003)などがある。しかし、どの技術項目を、どのような方法と順序性で、どこまでの到達度を目指すのかは、各教育機関での模索が続いている状態であり、看護実践力を高める具体的な教育モデルを示す先駆的研究は見当たらない。したがって、他校との比較検討も難しい現状にある。また、技術教育の質の留保しつつ、大学の特徴を生かした独

自の技術教育およびその判断基準を見出すには至っていない。

2. 本研究における基礎看護技術学習のモデル構築

研究代表者(前川)等の研究グループは、2008年より看護学実習に焦点を当て看護学生の看護実践力の育成に関する研究を行ってきた(前川、2009 他²)。そこから明らかになったことは、学生は実際に患者と関わることで、これまで学んだ看護技術の意味が明確になり、自分なりの看護実践を志向し始めるというものであった。そこで、学生が学内においても看護技術教育の重要性が実感でき、「看護技術」の習得が看護を学ぶ喜びへと転換できる学習モデルの構築を試みた。

1) 「基礎看護技術学習の道しるべモデル」の構築

(1) 学習モデルの基軸：モデルの基軸を「看護実践力」とし、先行研究および我々の看護教育観を反映させる項目、すなわち生活者としての患者の理解、看護技術のコア(安全、安楽、自立・自律、その人らしさ)を配慮した実践力とした。

(2) 学習項目の選定：看護基礎教育で教授すべき基礎看護技術を網羅する先行研究から全抽出しその妥当性を「看護学教育の在り方検討会」(文部科学省)で提言された看護基本技術項目から比較検討した。

(3) 学習テーマの決定：その必要性の度合い、学習の性質の観点から項目を分類整理し、項目群に命名を行い学習テーマとした。

(4) 学習の構造化：学習テーマ内の各項目と学習テーマを構造化す点として、「易」から「難」への発展、高い健康レベルから低い健康レベルを設定し、進行に伴い学習の広がり・深まりを示す配置構造とした。本モ

¹ 服部容子他(2008).看護学科新入生の入学動機と生活習慣に関する調査-「生活援助技術」の授業内容の検討-,甲南女子大学紀要,pp61-71.他

² 前川幸子(2009).看護学実習における「教え-学ぶ」の成り立ちに関する記述的研究,甲南女子大学紀要,pp87-96.他

デル図を、学生が“学習の道しるべ”として活用できるように、という願いを込めて、「基礎看護技術学習の道しるべモデル」（以下、「道しるべモデル」と略）と名づけた。

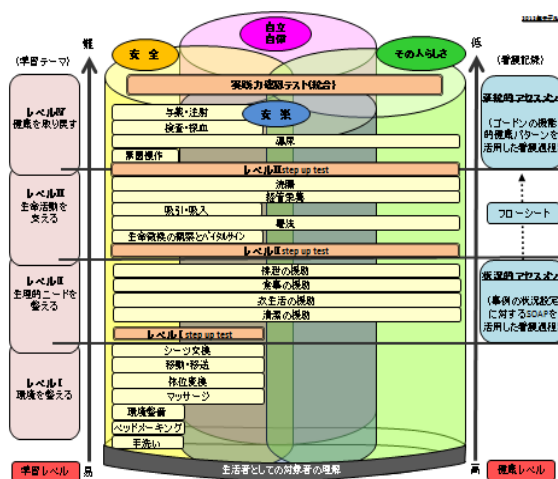


図1 本学における「基礎看護技術学習の道しるべモデル」

3. 研究の目的

本研究の目的は、看護実践力の基盤となる基礎看護技術教育において「生活者としての対象者の理解」「安全、安楽、自立・自律、その人らしさを考慮した看護援助」を基軸に据え、基礎看護技術における学習の深まりと広がり を考慮した「基礎看護技術学習の道しるべモデル」の構築及び評価基準の検証をすることにあり。

その際、異なるカリキュラム下にある他大学において、モデルを活用した教育を試み、その構造と教育内容の評価を通して、モデルの活用可能性を検討する。

4. 研究の方法

本学（以下、A大学）で定めたモデル図（図1）の活用可能性を探るために、他大学（以下、B大学）でも活用した。異なるカリキュラムと科目構成を持つ両校において、モデル構築の基本的理解を行ったことは、看護実践能力をはぐくむ基軸の理解、易から難への段階的に学ぶ看護技術のテーマ設定、健康レベル（健康障害が軽い状態）から低い健康レ

ベル（健康障害が重い状態）へと段階的に技術項目を配置した学び方、実践能力確認テストを取り入れた学び方、とした。両校で教育を実施し調査を行った。

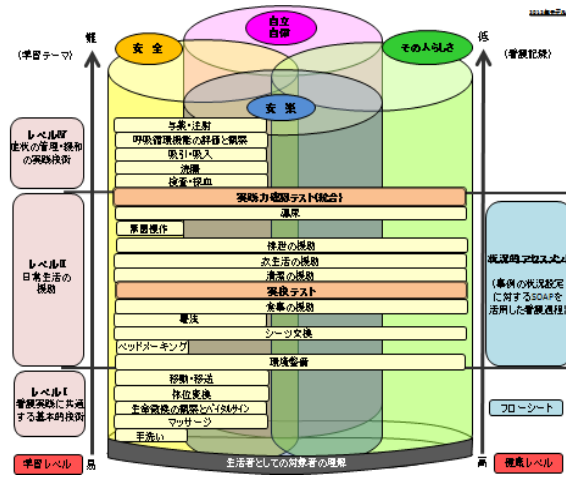


図2 B大学における「基礎看護技術学習の道しるべモデル」

1) 研究デザイン：質的記述的研究

2) 研究参加者：本モデルに基づく基礎看護技術教育を履修した A 大学看護学科 2 年生 104 名、および B 大学看護学科 2 年生 61 名。

3) データ収集内容・方法

(1) 教員による基礎看護技術教育終了時点で行った看護技術実践テストの評価：教員独自に作成した『看護実践能力の習得状況』をもとに、教員による知識・技術・態度の総合的評価（評価内容については結果に記載）を行った。

(2) 学生の看護技術習得状況について：独自に作成したアンケート調査により、学生の『看護実践への関心』及び『モデルに基づいた学び方』などに関して、5 段階リッカート法で行った。

(3) 本学習過程に対する学生の受けとめと意味づけ：自由記述法とした。

4) 分析方法

(1) 『看護実践能力の習得状況』の傾向を把握するために、各得点の満点を 100%とする得点率の集計とした。

(2) 両校の特徴を明らかにするため t 検定による解析 ($p < 0.05$) を行った。

(3) 記述内容を研究者間で真実性・信頼性を確保しながら分類、構造化を行った。

5) 倫理的配慮

研究代表者が属する大学の倫理委員会の承認を得て実施し、参加者には学業や成績の不利益が生じないことを説明し任意で同意を得た。

5. 研究の成果

1) 結果

研究参加者は、A 大学 2 年生 104 名 (有効回答率 58.7%)、B 大学 2 年生 44 名 (72.1%) であった。

(1) 基礎看護技術教育終了時点の技術試験による『看護実践能力の習得状況』の評価をみると、教員による知識・技術・態度の総合的評価 (実施内容の表明力 対象者の理解の状況 声かけと説明/必要物品の準備

原理原則に基づく実施と安全・安楽・自立/自律への配慮 その人らしさへの配慮 援助後の報告 自己課題を振り返る力、の 7 要素) の平均得点率は、A 大学は 75.4%、B 大学は 70.4%、7 要素の得点率は両校とも 66.4 ~ 84.3% の得点率であった。

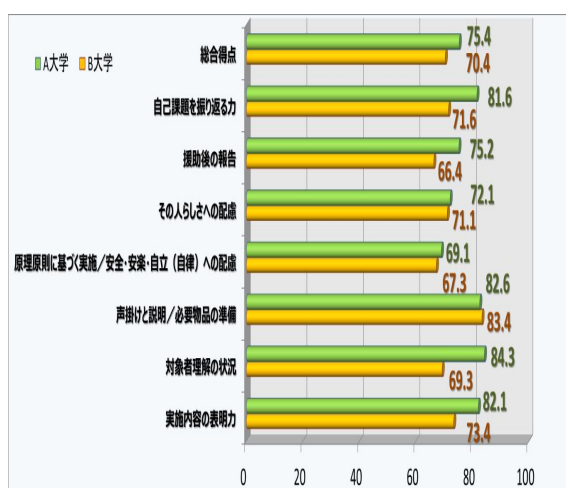


図 3 各大学における看護実践力習得状況

(2) 看護技術習得について独自に作成したアンケート調査：『看護実践への関心』及び

『モデルに基づいた学び方』に関する質問項目 (5 段階リッカート法：「とてもそう思う」を 5 点、「全くそう思わない」を 1 点として測定) では、「とてもそう思う」「少しそう思う」の合計で 77.1% 以上を占め、大学間の有意差は見られなかった (t 値, n.s.)。

(3) 本学習過程について、学生はどのように感じ、受け止めながら学習を進めているのかについて、自由記述内容を研究メンバーで分類、構造化した。

A 大学は、18 項目、B 大学 11 項目に分類された。さらに各大学における構造を見ていくと、A 大学では、「道しるべモデル」を用いることで、【看護技術の学習段階を俯瞰】することができ、【学習のつながりと積み重なりの実感】や【達成感と到達度の実感】できた。それにより、【看護のコアの意識化と定着】へと発展することで、【道しるべモデルの活用と有効性の実感】をしていた。これらの実感は、さらに【学習の履歴の確認と今後の学びへの期待】へとつながっていた。

B 大学は、「道しるべモデル」を用いることで、学習の【方向性を確認しながら学ぶ看護技術】を実感しながら学習ができた。それにより自分の看護技術を【ひとつひとつ確認しながら進む】という【学習の確実性】について実感できた。これらは、学んでいる途中だけではなく、【振り返ることで気づく段階的学習の良さ】や【看護技術の課題やつながりを自覚】し、【今後の実践に向けての展望】に発展していた。

2) 考察

各校ともに『看護実践能力の習得状況』と『看護実践への関心』が 7 割以上であったことから、本教育活動は、学生が看護実践への関心を高めながら看護実践能力を獲得するのに有効であることがわかった。また、『モデルに基づいた学び方』も 7 割以上の評価であったことから、学ぶ項目を段階的かつ順序性を意図して配置したことは、学生にとって

わかりやすい構造であったといえる。

構造化された「道しるべモデル」は、可視化されていることから、現在の学習段階を確認できるということだけでなく、これまでの学びを振り返る契機にもなり、さらには今後の学習展望へと導く指標になっていたことがわかった。また、可視化された「道しるべモデル」を用いた学びは、看護実践能力のコアとなる要素が意識化でき、その定着にも寄与していたことから、学生が教員から示唆されることなく今後の学びを自覚するための道しるべになっていたことが明らかになった。

3) まとめ

本モデルの特徴である可視化された学びの道筋が、各校ともに学生の学習意欲を刺激し、看護実践能力を定着させる一助になっていたことが分かった。また本モデルを用いた教授-学習過程を他大学と連携、協働しながら実践した結果、本モデルの汎用可能性が明らかになった。

以上から、基礎看護技術の学びの軸を構造化した教育活動は、カリキュラム構成に関わらず学びやすさと看護実践能力の獲得に貢献するものであることが示唆された。

今後も「道しるべモデル」を用いた教育評価をもとに、その都度の学生の状況に合わせてながらモデルの再構築を行い、さらに有効な看護教育方法の開発へと研究を継続・発展させていく方針である。

6. 主な発表論文

服部容子, 前川幸子, 脇坂豊美, 城宝環.

看護実践能力を高める看護技術教育内容の検討(その3) - 「基礎看護技術学習の道しるべモデル」を活用した教育の効果と課題 -

甲南女子大学紀要, 査読あり, 7号, 2013, pp9-22.

〔学会発表〕(計1件)

服部容子, 城宝環, 前川幸子, 野村亜由美, 原田千鶴, 宮崎伊久子, 永松いずみ, 佐藤 祐貴子.

看護実践能力を高める基礎看護技術教育モデルの検証 - 「基礎看護技術学習の道しるべモデル」の異なるカリキュラムにおける教育活動の評価より -

第33回日本看護科学学会, 2013年11月, 大阪市

7. 研究組織

(1) 研究代表者

前川 幸子 (MAEKAWA YUKIKO)

甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・看護学科・教授

研究者番号: 30325724

(2) 研究分担者

服部 容子 (HATTORI YOUKO)

甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・看護学科・准教授)

研究者番号: 20337116

脇坂 豊美 (WAKISAKA TOYOMI)

(甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・看護学科・講師)

研究者番号: 50315321

阿部 朋子 (ABE TOMOKO)

(甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・看護学科・助手)

研究者番号: 60512340

(H23年度まで研究分担者として参画)

城宝 環 (JOHO TAMAKI)

(甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・看護学科・助教)

研究者番号: 50638533

(H24年度から研究分担者として参画)

(3) 連携研究者

原田 千鶴 (大分大学・医学部)

研究者番号: 80248971

宮崎 伊久子 (大分大学・医学部)

研究者番号: 30347041

(4) 研究協力者

野村 亜由美 (首都大学東京・健康福祉学部)

永松 いずみ (大分大・学医学部)

吉良 いずみ (大分大学・医学部)

佐藤 祐貴子 (大分大学医学系研究科・看護学専攻修士課程)